

秋田県湯瀬地方のフロラ

秋田県立博物館 高田 順

はじめに

秋田県におけるフロラ研究は1930年代に一つのピークがあり、戦後はここ10年ほどに大きな進歩がみられる。しかしその全局的なデータや標本の蓄積はまことに少なく、小範囲をくわしく研究した発表も太平山（桑山ほか1964）、男鹿半島（望月1966）などきわめて少ないのが現状である。

鹿角市湯瀬地方は秋田県東北端の低地であり、フロラ調査の必要性は県境という条件の他にも主として昆虫研究者によりその特殊性が指摘されていた。このたび秋田県立博物館の地域研究として鹿角地区がとりあげられ、その一環として湯瀬地方の低地におけるフロラを調査することができた。3年間の調査でフロラとして一応のまとまりを得たのでここに報告することとした。

本研究を進めるにあたり、同定についての御指導を得た奥山春季先生、中池敏之先生、湯沢高校の望月陸夫氏に対し衷心より謝意を表す。また鹿角地方在住の博物館協力員、秋田営林局、東北電力、秋田自然史研究会の各位にも大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

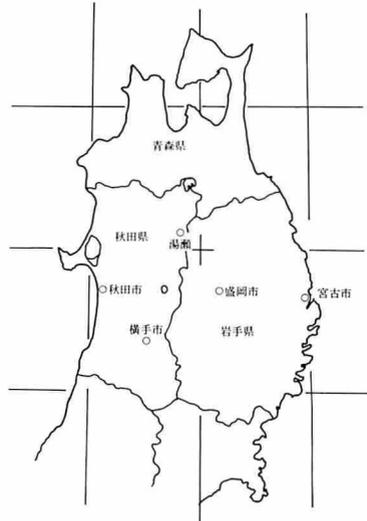
位置と環境

湯瀬は北緯40°07'、東経145°50'（第1図）に位置し、秋田県の東北方で岩手県に通ずる国道282号線に沿った温泉地を中心とした集落である。国道と平行して米代川が流れ、分水嶺は岩手県の具梨峠付近でその標高は430m程度である。湯瀬渓谷とよばれるこの地域は標高180mから250mにしか過ぎず、今回の調査範囲は両側の山地帯よりも低地に重点を置き標高350~400m以下の地域に限った。

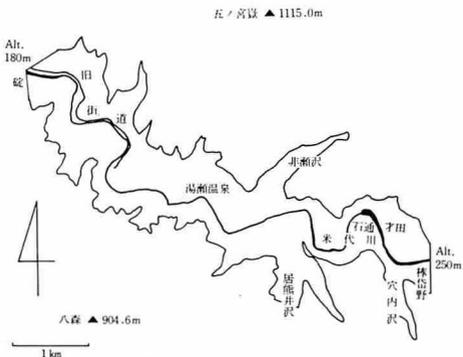
（第2図）

当地は県内でも秋田市からの距離が最も遠い地域に属し、古来植物相の調査も殆ど行われていない。そのため資料もまた極めて少ない地域と言える。歴史的には旧藩時代の南部領に属し、社会的には盛岡市と大館市を結ぶ要路として交通の便に用いられてきた。

湯瀬地方の地形は平地が極端に少ないことが特徴と言える。非瀬沢と居熊井沢が出会うあたりに多少の沖積地があり、湯瀬温泉の集落や水田が成立している他は殆ど平地がない。両側は急傾斜の山腹でその斜度は大部分30°を越える。そのため崩壊地が多く観察され、岩壁が露出している部分も数多く見られ、米代川は湯瀬温泉から下流では著しい渓谷を形成している。米代川は八幡平小豆沢に近くな



第1図 位置図



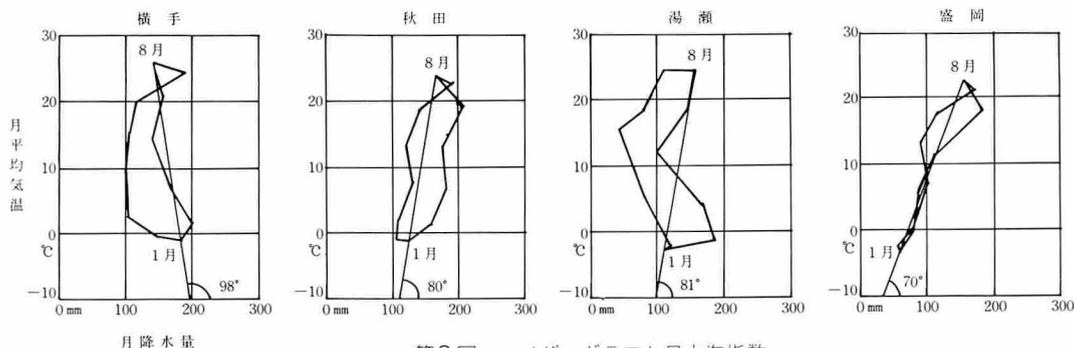
第2図 範囲図

り湯瀬発電所付近で水量をまし、やや川幅を広げてやがて熊沢川と合流する。山腹の傾斜は北側の五の宮嶽側で特にけわしく、その様子は非瀬沢付近でよく観察できる。一方南側の山体は多少ゆるやかで特に居熊井沢は奥の深い大きな沢となる。これらの状態は岩手県に入り兄畑より東ではしだいにそのけわしさを減じて行く。

この流域一帯は岩体の露出地が多く、碎石用としての採石が国道筋で2ヶ所、非瀬沢で1ヶ所行われている。岩相は古生層を基盤としその上を新第三系が広く覆っており、それらは湯瀬合礫凝灰岩層・兄畑溶結凝灰岩層・谷内溶結凝灰岩層など中新世のグ

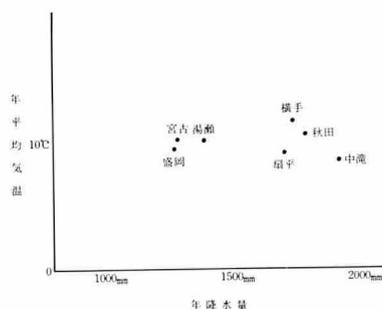
リーントフが大部分である。古生層は小範囲に分布し、粘板岩を主体とするものである。第四系は十和田軽石流堆積物と沖積層であるが本地域では地形の状態からして顕著ではない。本地域の地形や土壌に関連しつつ植生に影響を与える要素の一つはこの厚い火成岩ないしは火山砕屑岩の存在であろう。

湯瀬地方の気候を湯瀬発電所の1970～1973年のデータをもとに推定してみるとその特徴は降水量の少なさにあ



第3図 ハイザーグラフと日本海指数

ることが分る。試みに温雨図で表わし、日本海指数⁸⁾を測定すると第3図のようになる。秋田県内で多雪地として知られる横手市の日本海指数が著しく大きく、湯瀬は秋田市と同程度であり、内陸性気候と言われる岩手県盛岡市と横手市との中間的な値を示す。しかるに年降水量を比較すると第4図のように湯瀬地方は明らかに少雨型として区別することができ、秋田県内の他地域と異なる特徴を見出すことができる。湯瀬付近の米代川では少しの降雨でも著しく水位を増し、またその衰退も早い。これらは土壌全体の保水量が少ないことを示し、ひいては地質や地形に起因するものであろうが降水量の少ないことと合わせて考慮されるべき問題である。



第4図 気温と降水量

植生と植物相

湯瀬渓谷両側の森林についての人為の度合は斜面での自然崩壊による影響とのかね合いで甚だ不明確であり、一般に林相は雑多である(photo 5)。北側は草地をふくめて大部分植林が行われており、樹種はスギが多く、アカマツ・カラマツがこれにつぎ、一部にドイツトウヒ(photo 2)がみられる。県内の他の地域よりもカラマツやドイツトウヒは胸高直径が大きく、植林後かなりの年数を経ているもののようなものである。急傾斜地の広葉樹林が主にどのような種組成になっているかについて十分な資料はないが、非瀬沢での調査によればシナノキやミズナラが大部分であり、低木層はコマユミが量的に多く、草本層はチシマザサやミチノクホンモンジスゲが優占している。非瀬沢や居熊井沢の奥地は標高400～500m付近からブナ林となっており、急傾斜地には部分的にネズコが混り、天然生と考えられるスギの存在も目立つ。南側は殆ど皆伐され、北側の五の宮嶽でも国有林の伐採が進んでいる。

県境棒岱野付近の川辺(photo 6)にはわずかながら河畔林が発達しており、周囲はツルヨシにおおわれ、内部の小凸地にはフッキソウなどが多い。高木層はシロヤナギやハルニレ、亜高木層にはヤマグラが多い。低地の他の部分と同様にニセアカシアの侵入が見られる。増水時には冠水するため下層植生は不安定な様相を示し、個体の活力度も不十分である。ハルニレの幼木は穴内沢には大変多く、往時をしのばせるものがあるが、森林は殆ど全面的に伐採され残存林が小規模であり、全体像や復元した姿は大変に把握しにくい状態である。以上が当地域の森林植生の概要であるが他の地域との比較の参考にするため、非瀬沢におけるスギ植林とブナ林の植生調査資料をつけ加えておく。(第1表・第2表)

一方フロラについて言えば今回の調査範囲は大部分植林地や二次林であり、いずれも小規模なものが多いこと

第一表

群落名 スギ植林
調査番号 2 調査月日 51・9・2 調査場所 非瀬沢林道
調査者 J・T
高木層 24 m 85 %
亜高木層 — m — %
低木層 2 m 15 %
草本層 0.5 m 95 %
コケ層 — %
方位・傾斜 S 16°
海拔高 400m
調査面積 (m) 20 × 20
微地形・土壌
出現種数 74

B5-5	スギ	K2-2	リュウメイシダ	+	クマヤナギ
		2-2	ミゾダ	+	ヘビノネコギ
		1-2	サカゲイノデ	+	ミヤマケシダ
		1-2	ナラシダ	+	ソネ
		1-2	ウマノシロバ	+	チシマツバ
S1-2	ヤマブキ	1-2	キツリソウ	+	アキノキリンソウ
1-2	サワグルミ	+2	ヒカゲイノコズチ	+	ミヤマネズミカヤ
1-2	エゾアシサイ	+2	イワカマ	+	イヌカンゾク
+	ワシ	+	ミヤマベニシダ	+	オオハネボウシ
+	ゴトウスル	+	サトメダ	+	ジュウモンシダ
+	ミズキ	+	ツルニカサ	+	オオトリス
+	アオダモ	+	フタリスカ	+	チノクハシモシシヤ
+	コンアブラ	+	オククルマムラ	+	アオスゲ
+	タラシキ	+	ミズ	+	ゼンマイ
+	ハクウンボク	+	ハナタデ	+	ヤマオダマキ
+	トチノキ	+	ミツバ	+	スギ
+	ヤマブドウ	+	カノヅイトウ	+	ヌスビトハネ
+	カマズ	+	イヌトオナ		
+	エヒガライチゴ	+	ケチヂミササ		
+	ホオノキ	+	トコロ		
+	アカサ	+	ウチワシロ		
+	ベニイタヤ	+	ヒロハチンナンシヨウ		
+	オヒヨウ	+	ヤブレガサ		
+	カスミザラシ	+	ヤマイヌワラビ		
+	ユズデ	+	オシダ		
+	ウド	+	ノブキ		
+	ヤマモミジ	+	ミズヒキ		
+	クマウルシ	+	ワラビ		
		+	ルイロウボタン		
		+	ウワバシソウ		
		+	シオデ		
		+	ミヅバ		
		+	ツタウルシ		
		+	ハイスイツゲ		
		+	キツネガサ		

第二表

群落名 ブナ林
調査番号 1 調査月日 51・9・20 調査場所 非瀬沢林道
調査者 J・T
高木層 21 m 80 %
亜高木層 11 m 50 %
低木層 3 m 40 %
草本層 0.3 m 70 %
コケ層 — %
方位・傾斜 S 38° E 40°
樹高 510m
調査面積 (m) 10 × 20
微地形・土壌 二次林状
出現種数 44



B3-3	ブナ				
1-2	ミズナラ				
1-1	トチノキ				
1-1	ベニイタヤ				
(+)	スギ				
B3-3	ハクウンボク	K3-3	オオノカシダ	+	ナラシダ
		1-2	シンカン	+	ツタウルシ
		1-2	チシマツバ	+	ツノハシバ
		1-2	ミヤマケシダ	+	クシキダ
		+2	ゴトウスル	+	クルマユリ
S2-2	マルバマンサク	+2	イワカマ	+	ミヤマオシダ
2-2	オオバクモシ	+	ハイイヌガヤ	+	コケイラン
+2	サワバ	+	ヒメアサキ	+	コンアブラ
+2	アケボノ	+	ブナ	+	チゴユリ
+	リュウブ	+	マルバマンサク		
+	ムラサキサシ	+	タムシバ		
+	ハクウンボク	+	ヒメヒキ		
+	オオハネボク	+	ヤマノツツ		
+	タムシバ	+	トチノキ		
+	ウワバシタラ	+	ヤマツツ		
+	ブナ	+	アキノキリンソウ		
+	ヤマモミジ	+	ハイイヌツゲ		
+	カマズ	+	コマユシ		
		+	ミズナラ		
		+	リュウブ		
		+	ヤマブドウ		
		+	フジ		
		+	アオダモ		
		+	ベニイタヤ		
		+	ウルシ		

から下層植生は攪乱されており画一的でない。また人為の影響が過度でないので帰化植物がはびこることも少ない状況にある。以上のような理由から人里植物ないしは原野の植物が多い。湯瀬棒岱野のカラマツ林(photo 1)及び周辺はその典型的な例で、林相が疎開しており、低木層の刈り取りが行われているため草本層の発達がよくシダ類やイラクサ科・タデ科などが豊富で、ナガミノツルケマン・ナンブサナギイチゴやオオトボンガラなどの稀産種を生ずる。範囲を低地に限ったことから純粋なブナ林要素よりも下方に出現する植物が多いのは当然であるが、森林生でない種類の多いのがフロラ上の一つの特徴であろう。

湯瀬沢谷の南側山腹は樹木に覆われているが、北側には多くの草地が観察される。これらは大部分ススキ草地で中に岩角地が点々としてあり、アカマツが疎生している(photo 4)。アカマツは渓谷近くの岩壁地にも多くあり天然生のもので認め得る。アカマツ以外ではコバノトネリコやエゾイタヤ・シナノキなどの小高木が残存しており、多少集合している部分の下層植生の状態から見て、草地化してからの年月はそう多くないように思われる。これら草地は非瀬沢におけるように沢沿いから峰までの数百mの高度差に及ぶことがあり、多くはスギの植林が進行しつつあるけれども低地においてはよく草地植生の種組成を保っている。刈り取り後にはクズが全体を優占的に覆うが、アカカラマツ・エゾヤマハギ・オトコヨモギ・ノコンギク・オミナエシ・オトコエシ・クサボタン・ノアザミ・オオアブラガヤ・ヒキオコシ・ヤマハッカ・ヒメヒゴタイなどのやや草丈の高いふつう種やチャシバサゲ・ヒカゲスゲなどがまんべんなく分布する。さらに非瀬沢において一ヶ所本来的に草地植生と考えられる場所がある。小面積であるが崩壊性の岩角地であり、一種の風穴地帯を思わせる。相観的に草高の低さによって他と明らかに識別でき、次のような植物によって特徴づけられる。アイズシモツケ・イワゲダ・キバナノカラマツバ・イチゴツナギ・ナガハダサ・シオガマギク・タチゴゴメグサ・ヤマノコギリソウ・ミツバベンケイソウ。このような植生部分は範囲を限らず広がりがすことによってまだ発見できるものと思われ、この地域は基本的には森林であるもの人為による草地化により、多少の崩壊性草地の要素を含むススキ草地化が進行したものと考えられる。本地域の中ではフロラ的に貴重な部分である。

もう一つの特異的な植生は岩壁地植生である。八幡平小豆沢から湯瀬へ抜ける旧街道は後半は渓谷沿いとなり、

上下とも断崖となる。遠望すると大きな岩の上にはアカマツが連なる典型的な植物群落が見られる (photo 3)。ただ危険を伴うために十分な調査が出来ず国道沿いの石通り付近の2・3ヶ所を調査したに留まるが、それだけでもアイズシモツケ・クモノスダ・コモチレンゲ・ミヤマハタザオ・イワキンバイ・タチイチゴツナギなどが産し注目すべきフロラ構成を表わす。今後の調査の重点をかような立地に集中すればまだまだ種数はふえるものと考えられる。

当地域の低地フロラは地形や人為による草地植生、凝灰岩を中心として露出する岩壁地の植生、人為により攪乱されながら帰化植物などの進出が不充分である原野や林縁の植生などにより特徴づけられる。ラン科植物は少なく、水田雑草も他に比すると多くはない。降水量が少ないという内陸型気候であることが植生やフロラにどのような影響を与えているかは明確でない。岩手県植物誌(1970)を参考として調べてみると、岩手県の奥羽山脈地帯(Ⅲ・Ⅳ帯)にややふつうに産して今まで秋田県で知られていなかった植物は約30種(変品種をふくむ)にのぼるが今回の調査によってこれらの中から得られたものはナンブサナギイチゴ・オオバショウマ・バイカウツギとオトボンガラだけであり、アズマスゲ・オタルスゲ・サッポロスゲなどのスゲ類やヨツバハギ・オオバクサフジなどいずれも採集できなかつた。

植物区系地理の上からは岩手県の扱いは様々である。日本海側と同様に扱いつつながら陸中亜区として認める見解やエゾムツ地域として北海道との共通性を重視する考え方、あるいは北半を裏日本地域と同一視して北上山地南部を別に考える場合など、まだ十分な整理がなされていない。いずれにしても県境付近の湯瀬は気候的には類似しているものの北上山地の要素と考えられる植物は殆ど入っていないと考えてよいであろう。この点湯瀬渓谷を通り抜けルートとして北上山地から分布を広げているともいわれる蝶類とは移動性の点で多少状況をことにしていえることができる。一方地史的なフロラ要因については殆ど考慮するほどの材料を得ることができなかつたし、常識的に判断しても問題とすべきことはないように思われる。

本地域では県内のフロラ研究上から留意すべき植物も数多く見られるが、逆にいわゆる普通種で記録できなかつたものも多数にのぼる。それらの多くは池沼や湿地の植物でそのような環境がないことに起因するが、クラムゴケ・イヌスギナ・チゴザサ・ヤマユリ・ツルボ・キツネノカミソリ・ムラサキケマン・カスミザクラ・ネコハギ・エゾユズリハ・イワアカバナ・レンゲツツジ・ホツツジ・キキョウなど今後発見できる可能性の大きいものも多い。またタカサゴツウ・オトコオミナエシなど記録があつて確認できなかつたものもある。これらについては今後の研究によって補足して行きたいと考える。

分布上留意すべき種類

1. カラクサンダ *Pleurosoriopsis makinoi* (Maxim.) Fomin ワラビ科

小さなシダ類で岩上や樹上にコケとともに生じる。県内における従来の記録は少ないが当博物館には抱返り・藤駒岳・大鏡渓谷・露熊山峡・真昼岳などの標本があり、他に寒風山滝の頭・象湯・仁別に産することは確実であり珍しいものではない。採集者の認識のされ方でまだ産地がふえるものと考えられる。今回は穴内沢の大きな岩石上に多産するのを見出した。

2. カラクサイヌワラビ *Athyrium clivicola* Tagawa オンダ科

秋田県において1971年ごろまでヒロハイスワラビ *A. wardii* として認識されていた大部分は本種と考えてよい。ヒロハイスワラビは太平洋側ではいわき地方の温暖な海岸地方に達するだけで、日本海側でも山形県飛鳥などに稀産するに過ぎない。本県には産するとしても極めて稀なものでまだ確実な標本はない。カラクサイヌワラビ自身は稀なものではない。最下前側の小羽片(裂片)が耳状となるのが特徴である。なお本種の同定・学名は田川¹²⁾によつた。

3. アイツヤナシノデ *Polystichum* × *amboversum* Kurata オンダ科

本種の学名は倉田⁷⁾による。サカゲイノデとツヤナシノデの雑種であるといわれる。秋田県には従来記録がなかつた。今回湯瀬温泉で得たものは鱗片の色や形はややイワシロイノデに似て、中軸下部では完全に上向き、中ほどで横向きに、上部では下向する。やや中間の状態を示し、胞子のつき方も不完全である。精査することによって該当する標本が数多く見出せるものと考えられる。標本の同定は中池敏之先生によるものである。

4. クモノスダ *Camptosorus sibiricus* Rupr チャセンシダ科

石灰岩地帯の指標植物として著名であるが、安山岩上にも産し、その環境指標性は厳密なものではないようで

ある。本県では古く八森(村松1932)と山瀬(古家1938)に記録があるがその後両者とも追認されていない。湯瀬石通り道路脇の岩壁上に横に長い形で産する。産状からして岩質または水分が影響していると考えられる。石灰岩地帯を欠く本県では極めて稀な植物である。

5. オトボンガラ *Festuca extremiorientalis* Ohwi イネ科

本県未記録のイネ科植物で岩手県には稀産し、山形県では未記録のようである。湯瀬棒岱野で1976年6月22日に採集した。*Festuca* としては特徴のはっきりした植物である。

6. イチゴツナギ *Poa sphondylodes* Trim イネ科

葉舌が著しく長い特徴がある。村松(1932)にはヒメイチゴツナギとして秋田市・戸賀の記録がある。また田代岳(松田1974)の記録も発表されている。湯瀬では非瀬沢の草地に散生している。そこは崩壊地性の部分であり、前述の如く特徴的な植生を示す。本県では極めて稀なものであろう。

7. タチイチゴツナギ *Poa nemoralis* Linn. イネ科

石通りの岩上にイワデンダ・イワキンバイなどと共に生じる。茎や葉は細いが割合大きな株となる。従来は本州中部の深山に稀産するとされたもので、岩手県では1ヶ所記録されている。村松(1932)の秋田市の記録は多少疑問である。

8. ヒロハノドジョウツナギ *Glyceria leptolepis* Ohwi イネ科

湯瀬石通りの採石場付近にヤナギ類の混じるヨシ原がある。自然植生としての低層湿原かどうかは疑問であるが、オオスマハリイ・ホタルイ・エゾシロネ・クサレダマなどが見られる。そのヤナギ類の林縁部に本種が多く集まっている部分がある。花序全体の印象が黄色みを帯び、葉の幅が著しく広いことで他と容易に区別できる。村松(1932)に登載されているが産地の記録はなく、本県では極めて稀なものとする。

9. ネズミホソムギ *Lolium hybridum* Hausskn. イネ科

ネズミムギ *L. multiflorum* の芒のない形に似ており、花軸は著しくザラついている。長田らによるとこの交配種の方が我が国では多いとのことで、今回湯瀬の国道すじで得た標本もその範囲のものとする事ができる。

10. クロアブラガヤ *Scirpus sylvaticus* Linn. var. *maximowiczii* Regel カヤツリグサ科

大湯(古家1941)の記録がある他、仙北郡の低地での産地が知られているのみでやや稀な種類と考えられている。棒岱野の支沢と米代川の河岸砂地の2ヶ所で採集した。

11. タイワンヤマイ *Scirpus wallichii* Nees カヤツリグサ科

秋田県における本種についての最初の認識は望月陸夫氏による。また須藤によると本種の分布は県内では明らかになりつつあるが、東北地方全般での認識はまだ不十分とのことである。筆者の推測でもホタルイとの区分が十分徹底していないように思われる。今回は居熊井沢の水田雑草として本種を採集することができた。

12. イトハナビテンツキ *Bulbostylis densa* (Wall.) Hand.-Mazz. カヤツリグサ科

テンツキ属に似ているが、ハタガヤ属に属し、花柱基部の小球状の果頂が特徴である。向陽草地のやや湿った所に生じる。文献による記録は多く、秋の宮・手形山・大館・御所野(村松1932)、岩瀬～田代山(佐伯・佐藤1935)、男鹿(望月1966)などがあり、米田博及び筆者は鹿角市大湯の黒森山に多産することを確認している。今回は湯瀬才田で発見した。

13. オオタスキラン *Carex scitaeformis* Kükenth. カヤツリグサ科

旧街道沿いの湿地にタスキランと一緒に、しかも明確な違いをみせて生育している。最初の発見は望月陸夫氏である。同氏によれば県内では皆瀬村若畑につぐ第2の産地とのことである。

14. ツクバスケ *Carex blepharicarpa* Franch. var. *stenocarpa* Ohwi カヤツリグサ科

ショウジョウスケの変種で果胞が細く、嘴の長いものである。以上の理由からナガミショウジョウスケともいえる。北村⁶⁾はかの記載と同様に湯瀬旧街道の谷川のふちで採集した。奥山春季先生の同定によるものである。

15. シバスケ *Carex nervata* Franch. et Savat. カヤツリグサ科

シバ草原の主要な構成種として著名なものである。本県でも手形山・十和田(村松1932)、男鹿(望月1966)などの記録がある。最近の農村生活の変化によって各地の採草場が放棄され遷移が進行しつつあり、シバ草原は減少の一途をたどっている。今後とも産地の限定される種であろう。旧街道のグランド付近に多産する。鹿角市大湯の黒森山ではアカマツ林内に産する。

16. シラカンバ *Betula mandshurica* (Regel) Nakai var. *japonica* (Miq.) Murai カバノキ科¹⁶⁾
 本種の同定及び学名については村井三郎博士の御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。村松には県内に
 稍稀としているが産地の記載がない。これはヒロハドジョウツナギと同じで同書としては異例である。鹿角地方
 には自生(二次的なもの)と思われるものが点々とあり、鹿角市北野には県内唯一の林分がある。
17. イワカラマツ *Thalictrum minus* Linn. var. *sekimotoanum* (Honda) Kitam. キンボウゲ科¹⁰⁾
 本州中部の岩上に生えたとされている。茎が多少屈曲し、花序や葉に腺毛が著しい。草丈はやや小さい。湯瀬
 石通りの岩上で採集したが同じ場所のやや壮大な一品は腺毛を全く欠き母種と判断された。県内の岩壁地の本種
 については集中的に精査する必要がある。本県未記録種である。
18. オオパシヨウマ *Cimicifuga japonica* (Thunb.) Sprengel キンボウゲ科
 旧街道付近に産する。1974年5月26日の望月・高橋・高田らの採集によって本県に産することが明らかになっ
 た。その後、開花標本を得ている。
19. ゴヨウアケビ *Akebia pentaphylla* Makino アケビ科
 アケビ *A. quinata* とミツバアケビ *A. trifoliata* の雑種とされる植物で秋田市・藤木(村松1932)の記録が
 ある。小葉は5枚であるがよく観察すると同じつるの先端部などには3枚や4枚のものも多くまじる。また小葉
 はミツバアケビのように多少波状縁を示す。花はあまり大きくない。従来県内にはアケビがややふつうに産する
 ように言われるが再検討を要すると思う。またややもすると植栽のものと同種するむきもあり、記録する際には
 栽培品やその逸出品については分る範囲で明確にすべきものとする。棒岱野の明るいカラマツ林で採集した。
20. ナガミノツルケマン *Corydalis ochotensis* Turcz. var. *raddeana* (Regel) Nakai ケンシ科
 棒岱野付近に割合多産する。果実の形状から本変種に該当するものとする。岩手県では基本種より変種の方
 が多いようである。村松(1932)にはツルケマンの記録があるが本変種についての認識が不十分な時代とも考え
 られ、大湯から北秋田地方に産するとされるツルケマンについては再検討が必要である。
21. エゾハタザオ *Arabis pendula* Linn. アブラナ科
 草高1.2 mに達する属中最大のものである。草丈・多毛・扁平な果実等の明確な特徴をもつ。棒岱野から才田
 にかけての道路わきや湯瀬公園に産する。村松(1935)に湯瀬の記録があるが追認の意味でとりあげた。
22. コモチレンゲ *Sedum iwawange* (Makino) Makino var. *boehmeri* (Makino) Ohwi ベンケイソウ科
 県内フロラの研究上では割合和名の変動の激しかったものである。現在上記の和名が適当と考えられるが、こ
 のような内陸産のものと男鹿半島などの海岸岩上のものが同一 Taxon に属するかどうかは今後検討する必要が
 ありそう。石通りの岩上に産する。
23. バイカウツギ *Philadelphus satsumi* Sieb. ユキノシタ科
 やや太平洋側に偏った分布をする落葉低木で、花が4数という著しい特徴がある。穴内沢の雑木林内で開花中
 の本種を2本見出した。本地域全域を踏査してもその分布は極めて少ないものと予想される。県内未記録であ
 り従来発表されている分布図からはほぼ比限と考えられる。^{4・15)}
24. アイズシモツケ *Spiraea chamaedryfolia* Linn. var. *pilosa* (Nakai) Hara バラ科
 フタスジチョウの食草として蝶類研究者により早くから分布が知られていた。旧街道の溪谷上部の林下に多産
 するほか、非瀬沢の崩壊性草地、石通りの岩壁地にも分布する。
25. アオナワシロイチゴ *Rubus parvifolius* Linn. var. *concolor* (Koidz) Makino et Nemoto バラ科
 湯瀬才田付近の林縁や原野に産するものは葉裏が緑色で白綿毛をもたないものが多く、基本種と多少生育地を
 分けている。従来上小阿仁(古家1939)の記録があるのみであるが、分布はもっと一般的なものと予想してい
 る。
26. ナンブサナギイチゴ *Rubus oldhami* Miq. var. *borealis* Koidzumi バラ科
 母種に比して花梗がやや長い、がくの刺が小・疎、花弁が少し大、小葉3~5のような区別点を有するものと
 されている。地理的分布の状態やがくの刺の様子から妥当なものと思うが、小葉の数はほぼ5~(7)であった。棒
 岱野に多い。学名は岩手県植物誌(1970)によった。
27. ヤブハギ *Desmodium fallax* Schindl. マメ科
 ヌズビトハギ *D. oxyphyllum* に近似しており、しばしばその変種として取り扱われる。県内の記録は殆ど
 ないが割合普通に産するようであり、湯瀬産のものは形態的特徴が明瞭である。

28. タチコゴメグサ *Euphrasia maximowiczii* Wettst. ゴマノハグサ科

全体に毛が多く変種であるエゾコゴメグサ var. *yezoensis* に近いが苞葉の距歯の先が芒状になることから該当しないと考えられる。分布上からはミチノクコゴメグサ var. *arcuata* とすべきものかもしれないが葉形の記載が一致しない。母種においても葉の下面が有毛な場合があるので一応基本種の変異の中と判断した。非瀬沢の草地に稀産する。県内では鳳凰山(村松1932)の記録のみである。

湯瀬地方低地における高等植物目録

このリストは1975年から1976年にかけて十数回の実地踏査によって観察・採集した植物名の報告である。湯瀬産として112科640種17変品種を記録する。本来は学名を併記すべきであるが紙幅の関係で省略した。

凡 例

- ・科名・和名・配列等は特記以外はすべて大井によった。ただし※印は長田、※※は北村他、※※※はその他である。変品種は2段さげて記した。
- ・No.の後の○印は腊葉標本を作製した種で、他は現地での観察による。標本はすべて秋田県立博物館に収納している。文献からの引用は今回はしなかった。
- ・同定の大部分は筆者自身であるが、ごく一部については奥山春季先生・中池敏之博士・県立湯沢高校の望月隆夫氏のご教示を得たものがある。
- ・ササ類はふつうに出現するがクマイザサ・チマキザサについては変異の幅に確信をもてないので今回はリストから除外した。

シダ植物門

トクサ科

- 1. スギナ
- 2. トクサ

ヒカゲノカズラ科

- 3. ○トウゲシバ
- 4. ○ヒカゲノカズラ

イワヒバ科

- 5. ○ヒモカズラ

ハナヤスリ科

- 6. ○フユノハナワラビ
- 7. ○エゾフユノハナワラビ
- 8. ○ナガボノハナワラビ
- 9. ○ナツノハナワラビ

ゼンマイ科

- 10. ゼンマイ
- 11. ヤマドリゼンマイ

ワラビ科

- 12. ○オウレンシダ
- 13. ○イヌシダ
- 14. ワラビ
- 15. ○イワガネゼンマイ
- 16. ○カラクサシダ
- 17. クジャクシダ

キジノオシダ科

- 18. ヤマソテツ

オシダ科

- 19. イヌガンソク

- 20. クサソテツ
- 21. コウヤワラビ
- 22. イワデンダ
- 23. ジュウモンジシダ
- 24. ○サカゲイノデ
- 24. ○イワシロイノデ
- 25. ○アイツヤナシイノデ***
- 26. ホソイノデ
- 27. リョウメンシダ
- 28. ○ナライシダ
- 29. オンダ
- 30. ○クマワラビ
- 31. ○ミヤマベニシダ
- 32. ○ミヤマイタチシダ
- 33. ○イワイタチシダ
- 34. ミゾシダ
- 35. ○ミヤマワラビ
- 36. ヒメシダ
- 37. ○イッポンワラビ
- 38. ○オオメシダ
- 39. ○ミヤマシケンダ
- 40. ○ホソバシケンダ
- 41. ○シケンダ
- 42. ○ミヤマメシダ
- 43. ○ヘビノネゴザ
- 44. ○サトメシダ
- 45. ○イヌワラビ
- 46. ○ヤマイヌワラビ

- 47. ○カラクサイヌワラビ***

シンガシラ科

- 48. シンガシラ

チャセンシダ科

- 49. トラノオンダ
- 50. コタニワタリ
- 51. ○クモノスシダ

種子植物門

裸子植物亜門

イヌガヤ科

- 52. ハイイヌガヤ

マツ科

- 53. カラマツ (cult)
- 54. アカマツ

スギ科

- 55. スギ (cult)

ヒノキ科

- 56. クロベ

被子植物亜門

単子葉植物綱

ガマ科

- 57. ガマ

ヒルムシロ科

- 58. ○ヒルムシロ

オモダカ科

- 59. ○ヘラオモダカ

- 60. オモダカ

トチカガミ科

61. ◦セキショウモ
イネ科
62. アオネザサ
63. チシマザサ
64. スズメノテッポウ
65. オオアワガエリ
66. ◦コヌカグサ
67. ヤマスカボ
68. ◦ヤマアワ
69. ◦ヒメノガリヤス
70. ◦ノガリヤス
71. ◦カニツリグサ
72. ◦ハネガヤ
73. イブキヌカボ
74. ハルガヤ
75. コウボウ
76. ネズミムギ*
77. ◦ネズミホソムギ*
78. ◦ヤマカモジグサ
79. アオカモジグサ
79. ◦ タチカモジ
80. ◦カモジグサ
81. ◦キツネガヤ
82. カモガヤ
83. ◦トボシガラ
84. ◦ヒロハノウシノケグサ
85. ◦オオトボシガラ
86. スズメノカタビラ
87. ミゾイチゴツナギ
88. ◦イチゴツナギ
89. ◦タチイチゴツナギ
90. ◦ナガハグサ
91. ◦ドジョウツナギ
92. ◦ヒロハノドジョウツナギ
93. コメガヤ
94. ホガエリガヤ
95. ◦エゾノサヤヌカグサ
96. ツルヨシ
97. ヨシ
98. ◦タツノヒゲ
99. カゼクサ
100. ◦オオニワホコリ
101. ◦シナダレスズメガヤ*
102. ◦ネズミガヤ
103. ◦オオネズミガヤ
104. ◦ミヤマネズミガヤ
105. シバ
106. ◦トダシバ
107. チカラシバ
108. エノコログサ
109. ◦アキノエノコログサ
110. ◦キンエノコロ
111. ◦ヌカキビ
112. ◦メヒシバ
113. ◦アキメヒシバ
114. ◦スズメノヒエ
115. ◦ケチヂミザサ
116. イスビエ
116. タイヌビエ
117. ◦アブラススキ
118. チガヤ
119. ススキ
120. ◦オオアブラススキ
121. ◦キタササガヤ
122. ◦アシボソ
123. コブナグサ
124. ウシノシッペイ
- カヤツリグサ科**
125. ◦ヒメクグ
126. ◦カワラスガナ
127. ◦ウシクグ
128. カヤツリグサ
129. ◦チャガヤツリ
130. ◦タマガヤツリ
131. ◦ヒナガヤツリ
132. ◦クロアブラガヤ
133. ◦アブラガヤ
134. ◦タイワンヤマイ
135. ◦ホタルイ
136. ◦シズイ
137. ◦ヒメヒラテンツキ
138. ◦アゼテンツキ
139. ◦イトハナビテンツキ
140. クログワイ
141. ◦シカクイ
142. ◦ハリイ
143. ◦オオヌマハリイ
144. ミノボロスゲ
145. ◦オオカワズスゲ
146. ◦サドスゲ
147. ◦アズマナルコ
148. ◦カワラスゲ
149. アゼスゲ
150. ◦オオタスキラン
151. ◦タスキラン
152. ◦ナルコスゲ
153. ◦ショウジョウスゲ
153. ◦ ツクパスゲ
154. ◦コカンスゲ
155. ◦シバスゲ
156. ◦チャシバスゲ
157. ◦アオスゲ
158. ◦ミチノクホンモンジスゲ
159. ◦ミヤマカンスゲ
160. ◦ヒメカンスゲ
161. ◦オクノカンスゲ
162. ◦ヒロバスゲ
163. ◦ヒエスゲ
164. ヒカゲスゲ
165. ◦グレーンスゲ
166. ◦タガネソウ
167. ◦ミヤマジュズスゲ
168. ◦ヒゴクサ
169. ◦エナンヒゴクサ
170. ヒメシラスゲ
171. ◦カサスゲ
172. ◦オオカサスゲ
173. ◦ピロードスゲ
- サトイモ科**
174. ◦ヒロハテンナンショウ
175. コウライテンナンショウ
176. ミズバショウ
- ウキクサ科**
177. ウキクサ
178. アオウキクサ
- ホシクサ科**
179. ◦ヒロハイヌノヒゲ
- ツユクサ科**
180. ツユクサ
181. イボクサ
- イグサ科**
182. スカボシソウ
183. ◦スズメノヤリ
184. クサイ
185. イ
186. ◦アオコウガイゼキショウウ
187. ◦タチコウガイゼキショウウ
188. ◦コウガイゼキショウウ

ユリ科

189. タマガワホトトギス
 190. ◦ヤマジノホトトギス
 191. タチギボウシ
 192. オオバキボウシ
 193. ◦ヤブカンゾウ
 194. ◦ヒメニラ
 195. ノビル
 196. オオウバユリ
 197. オニユリ
 198. クルマユリ
 199. ◦カタクリ
 200. ◦ミヤマナルコユリ
 201. ナルコユリ
 202. ユキザサ
 203. マイヅルソウ
 204. ホウチャクソウ
 205. チゴユリ
 206. ツクパネソウ
 207. エンレイソウ
 208. ◦タチシオデ
 209. ◦シオデ
 210. ◦サルトリイバラ

ヤマイモ科

211. ヤマノイモ
 212. ◦オニドコロ
 213. ◦ウチワドコロ

アヤメ科

214. キショウブ**

ラン科

215. ◦オオヤマサギソウ
 216. ツチアケビ
 217. ◦ギンラン
 218. ◦ササバギンラン
 219. ◦ショウキラン
 220. ネジバナ
 221. ◦ミヤマウズラ
 222. クモキリソウ
 223. ◦サイハイラン
 224. コケイラン
 225. シュンラン

双子葉植物綱**離弁花類****ドクダミ科**

226. ドクダミ

センリョウ科

227. ヒトリシズカ

228. フタリシズカ

ヤナギ科

229. ヤマナラシ
 230. ドロヤナギ
 231. ◦シロヤナギ
 232. キツネヤナギ
 233. ◦オノエヤナギ
 234. イヌコリヤナギ

クルミ科

235. サワグルミ
 236. オニグルミ

カバノキ科

237. サワシバ
 238. ツノハシバミ
 239. ◦シラカンバ
 240. ヤマハンノキ

ブナ科

241. ブナ
 242. ミズナラ
 243. コナラ
 244. ◦カンゾ
 245. クリ

ニレ科

246. ◦ハルニレ
 247. ◦オヒョウ
 248. ケヤキ
 248. ◦メゲヤキ

クワ科

249. ◦ヤマグリ
 250. カナムグラ
 251. ◦カラハナソウ

イラクサ科

252. ◦エゾイラクサ
 253. ◦ムカゴイラクサ
 254. ◦ミヤマイラクサ
 255. ◦アオミズ
 256. ◦ミズ
 257. ウワバミソウ
 258. ヤマトキホコリ
 259. ◦コアカソ
 260. ◦アカソ

ヤドリギ科

261. ヤドリギ

ウマノスズクサ科

262. ◦ウスバサイシン

タデ科

263. ヒメスイバ
 264. スイバ
 265. ギシギシ
 266. ◦エゾノギシギシ
 267. ミズヒキ
 268. ◦ミチヤナギ
 269. イシミカワ
 270. ママコノシリヌグイ
 271. ◦ミヅソバ
 272. ◦ウナギヅカミ
 273. ◦タニソバ
 274. ◦サナエタデ
 275. ◦ヤナギタデ
 276. ◦ネバリタデ
 277. ◦ハルタデ
 278. ◦ハナタデ
 279. ◦イスタデ
 280. イタドリ
 281. オオイタドリ
- アカザ科**
282. ◦シロアカザ
- ヒユ科**
283. ◦ヒカゲイノコズチ
 284. ◦ヒナタイノコズチ
- スベリヒユ科**
285. スベリヒユ
- ナデシコ科**
286. ◦ツメクサ
 287. ◦オオヤマフスマ
 288. オランダミミナグサ
 289. ミミナグサ
 290. ウシハコベ
 291. ◦コハコベ
 292. ◦サワハコベ
 293. ◦ノミノフスマ
 294. ◦カワラナデシコ
 295. ◦フシグロ
 296. ムシトリナデシコ (逸出)
- カツラ科**
297. カツラ
- キンポウゲ科**
298. クサボタン
 299. ボタンズル
 300. オキナグサ
 301. ◦アズマイチゲ

302. ◦キクザキイチゲ
 303. ウマノアシガタ
 304. ◦キツネノボタン
 304. ◦ ヤマキツネノボタン
 305. ◦アキカラマツ
 305. ◦ イワカラマツ
 306. ◦ミヤマカラマツ
 307. ヤマオダマキ
 308. オクトリカブト
 309. ルイヨウショウウマ
 310. サラシナショウウマ
 311. ◦オオバショウウマ
 312. シラネアオイ
アケビ科
 313. ミツバアケビ
 314. ◦ゴヨウアケビ
メギ科
 315. ◦ルイヨウボタン
 316. キバナイカリソウ
ツツラフジ科
 317. ◦コウモリカズラ
モクレン科
 318. ホオノキ
 319. タムシバ
クスノキ科
 320. ◦オオバクロモジ
 321. ◦アブラチャン
ケシ科
 322. クサノオウ
 323. タケニグサ
 324. ◦エゾエンゴサク
 325. ◦ナガミノツルケマン
 326. ◦ミヤマキケマン
アブラナ科
 327. ◦ジャニンジン
 328. ◦タネツケバナ
 329. ◦オオバタネツケバナ
 330. ◦コンロンソウ
 331. イスガラシ
 332. スカシタゴボウ
 333. ナズナ
 334. ◦エゾノイワハタザオ
 335. ◦ヤマハタザオ
 336. ◦エゾハタザオ
 337. ◦ミヤマハタザオ
 338. ◦ハクサンハタザオ
ベンケイソウ科
 339. ◦ミツバベンケイソウ
 340. ◦ツルマンネングサ (逸出)
 341. ◦コモチレンゲ
ユキノシタ科
 342. ヤグルマソウ
 343. ◦トリアシショウウマ
 344. ダイモンジソウ
 345. ◦チシマネコノメ
 346. ◦ネコノメソウ
 347. ◦ツルネコノメソウ
 348. ウメバチソウ
 349. イワガラミ
 350. ゴトウズル
 351. ノリウツギ
 352. エゾアジサイ
 353. ◦バイカウツギ
 354. ◦ウツギ
マンサク科
 355. マルバマンサク
バラ科
 356. ◦アイヅシモツケ
 357. ヤマブキショウウマ
 358. ヘビイチゴ
 359. ◦ノウゴウイチゴ
 360. ◦ヒメヘビイチゴ
 361. ◦イワキンバイ
 362. ◦キジムシロ
 363. ◦ミツバツチグリ
 364. ◦ミツモトソウ
 365. ◦カワラサイコ
 366. ◦コキンバイ
 367. ダイコンソウ
 368. オオダイコンソウ
 369. クマイチゴ
 370. モミジイチゴ
 371. ◦クロイチゴ
 372. ◦ナワシロイチゴ
 372. ◦ アオナワシロイチゴ
 373. ◦エビガライチゴ
 374. ◦ナンブサナギイチゴ***
 375. オニシモツチ
 376. キンミズヒキ
 377. ノイバラ
 378. ◦エゾヤマザクラ
 379. ウワミズザクラ
 380. ◦カマツカ
 381. ナナカマド
 382. アズキナシ
マメ科
 383. イヌエンジュ
 384. ◦エゾヤマハギ
 385. ◦メドハギ
 386. ヤハズソウ
 387. ススビトハギ
 388. ◦ヤブハギ
 389. ◦ツルフジバカマ
 390. ◦ホドイモ
 391. クズ
 392. ウスバヤブマメ
 393. フジ
 394. ニセアカシヤ
 395. イタチハギ
 396. ミヤコグサ
 397. ムラサキツメクサ
 398. シロツメクサ
フウロソウ科
 399. ゲンノショウコ
カタバミ科
 400. ◦ミヤマカタバミ
 401. カタバミ
 402. エゾタチカタバミ
ミカン科
 403. ◦サンショウ
ニガキ科
 404. ◦ニガキ
ヒメハギ科
 405. ◦ヒメハギ
トウダイグサ科
 406. ナツトウダイ
ツゲ科
 407. ◦フッキソウ
ドクウツギ科
 408. ドクウツギ
ウルシ科
 409. ツタウルシ
 410. ヤマウルシ
 411. スルデ
モチノキ科
 412. ハイイヌツゲ
 413. ヒメモチ
ニシキギ科

- 414. ツルウメモドキ
- 415. ◦ コマユミ
- 416. ツルマサキ
- 417. ◦ ツリバナ
- 417. ◦ エゾツリバナ
- ミツバウツギ科**
- 418. ミツバウツギ
- カエデ科**
- 419. コハウチワカエデ
- 420. ◦ ハウチワカエデ
- 421. ◦ ヤマモミジ
- 422. ◦ アカイタヤ
- 422. ◦ オニイタヤ**
- 422. ◦ エゾイタヤ**
- トチノキ科**
- 423. トチノキ
- ツリフネソウ科**
- 424. キツリフネ
- 425. ◦ ツリフネソウ
- クロウメモドキ科**
- 426. ◦ クロウメモドキ
- 427. イソノキ
- ブドウ科**
- 428. ヤマブドウ
- 429. エビヅル
- 430. ◦ サンカクズル
- 431. ◦ ノブドウ
- 432. ツタ
- シナノキ科**
- 433. ◦ オオバボダイジュ
- 434. シナノキ
- マタタビ科**
- 435. ◦ サルナン
- 436. マタタビ
- 437. ◦ ミヤママタタビ
- オトギリソウ科**
- 438. ◦ トモエソウ
- 439. コケオトギリ
- 440. ◦ オトギリソウ
- 440. オシマオトギリ
- スマレ科**
- 441. ◦ アオイスマレ
- 442. ◦ スマレ
- 443. ◦ ヒカゲスマレ
- 444. ◦ ナガハシスマレ
- 445. ◦ オオタチツボスマレ

- 446. ◦ タチツボスマレ
- 447. ◦ ツボスマレ
- 448. オオバキスマレ
- キブシ科**
- 449. ◦ キブシ
- ジンチョウゲ科**
- 450. ◦ ナニワズ
- ミソハギ科**
- 451. ◦ キカシグサ
- 452. ミソハギ
- ウリノキ科**
- 453. ウリノキ
- アカバナ科**
- 454. ◦ ウシタキシソウ
- 455. ◦ タニタデ
- 456. ヤナギラン
- 457. ◦ アカバナ
- 458. アレチマツヨイグサ*
- アリノトウグサ科**
- 459. アリノトウグサ
- ウコギ科**
- 460. タラノキ
- 461. ウド
- 462. トチバニンジン
- 463. ◦ ウコギ
- 464. ハリギリ
- セリ科**
- 465. ◦ オオチドメ
- 466. ウマノミツバ
- 467. シャク
- 468. ◦ ヤブニンジン
- 469. ヤブジラミ
- 470. オヤブジラミ
- 471. ミツバ
- 472. ◦ カノツメソウ
- 473. セリ
- 474. ◦ イブキボウフウ
- 475. ドクゼリ
- 476. ◦ ミヤマセンキュウ
- 477. ◦ オオバセンキュウ
- 478. アマニュウ
- 479. ◦ エゾニュウ
- 480. ◦ ヤマゼリ
- 481. オオハナウド
- ミズキ科**
- 482. ヒメアオキ

- 483. ◦ ハナイカダ
- 484. ミズキ
- 485. ヤマボウシ
- 合併課類**
- リュウブ科**
- 486. リュウブ
- イチヤクソウ科**
- 487. イチヤクソウ
- ツツジ科**
- 488. ヤマツツジ
- 489. ムラサキヤシオ
- 490. ハナヒリノキ
- 491. ウスノキ
- 492. アクシバ
- サクラソウ科**
- 493. クサレダマ
- 494. コナスビ
- 495. オカトラノオ
- エゴノキ科**
- 496. エゴノキ
- 497. ハクウンボク
- モクセイ科**
- 498. ◦ イボタノキ
- 499. アオダモ
- リンドウ科**
- 500. リンドウ
- 501. ツルリンドウ
- ガガイモ科**
- 502. ◦ ガガイモ
- 503. ◦ イケマ
- 504. スズサイコ
- ヒルガオ科**
- 505. コヒルガオ
- 506. ヒルガオ
- 507. ◦ ネナシカズラ
- ムラサキ科**
- 508. ◦ オニルリソウ
- 509. ◦ ムラサキ
- 510. タチカメバソウ
- 511. ◦ タビラコ
- クマツヅラ科**
- 512. ◦ ムラサキシキブ
- 513. クサギ
- シソ科**
- 514. ◦ ツルニガクサ
- 515. ◦ ヒメナミキ

516. ◦エゾタツナミソウ
 517. ◦カワミドリ
 518. ランショウモンカズラ
 519. カキドオシ
 520. ウツボグサ
 521. ◦ジャコウソウ
 522. ◦メハジキ
 523. ◦キセリタ
 524. イスゴマ
 525. ◦ホトケノザ
 526. ヒメジソ
 527. ◦エゾシロネ
 528. コシロネ
 529. シロネ
 530. ◦クルマバナ
 531. ◦イストウバナ
 532. ミヤマトウバナ
 533. ハッカ
 534. ナギナタコウジュ
 535. クロバナヒキオコシ
 536. ◦ヒキオコシ
 537. ◦ヤマハッカ
- ナス科**
 538. ホオズキ (逸出)
- ゴマノハグサ科**
 539. ◦ミゾホオズキ
 540. オオバミゾホオズキ
 541. ◦ムラサキサギゴケ
 542. ◦トキワハゼ
 543. ◦アゼナ
 544. タチイヌノフグリ
 545. クガイソウ
 546. ◦タチコゴメグサ
 547. ◦コシオガマ
 548. ◦エゾシオガマ
 549. ◦シオガマギク
- タヌキモ科**
 550. ◦タヌキモ
- ハエドクソウ科**
 551. ◦ハエドクソウ
- オオバコ科**
 552. オオバコ
 553. ヘラオオバコ
- アカネ科**
 554. アカネ
 555. ◦キバナカワラマツバ
555. ◦ カワラマツバ
 556. ◦オククルマムグラ
 557. クルマムグラ
 558. ◦ヤエムグラ
 559. ◦ホソバノヨツバムグラ
 560. ◦オオバノヤエムグラ
 561. ◦ヨツバムグラ
 562. ◦クルマバスウ
- スイカズラ科**
 563. ニリトコ
 564. カンボク
 565. オオカメノキ
 566. ガマズミ
 567. ◦ミヤマガマズミ
 568. ウゴツクバネウツギ
 569. タニウツギ
 570. ◦アラゲヒョウタンボク
- オミナエシ科**
 571. オトコエシ
 572. オミナエシ
- ウリ科**
 573. ◦キカラスウリ
 574. ◦ミヤマニガウリ
- キキョウ科**
 575. ツリガネニンジン
 576. ソバナ
 577. ホタルブクロ
 578. ◦タニギキョウ
 579. ツルニンジン
 580. ミヅカクン
- キク科**
 581. ハハコグサ
 582. チチコグサ
 583. ヤマハハコ
 583. カワラハハコ
 584. カセンソウ
 585. ◦ヤブタバコ
 586. ◦サジガクビソウ
 587. ◦ガクビソウ
 588. センボンヤリ
 589. オクモミジハグマ
 590. ヒヨドリバナ
 590. ヨツバヒヨドリ
 591. ◦フジバカマ (逸出?)
 592. アキノキリンソウ
 593. ◦ユウガギク
594. アズマギク
 595. ヒメジョオン
 596. ヒメムカシヨモギ
 597. シラヤマギク
 598. ゴマナ
 599. ◦ヒメシオン
 600. ◦ノコンギク
 600. ヤマシロギク
 601. フキ
 602. ◦ダンドボロギク*
 603. ハンゴンソウ
 604. サワオグルマ
 605. モミジガサ
 606. ◦タマブキ
 607. ◦イスドオナ
 608. ◦ヤブレガサ
 609. ◦ヤマノコギリソウ
 610. トキンソウ
 611. オトコヨモギ
 612. ◦イヌヨモギ
 613. オオヨモギ
 614. ヨモギ
 615. ノブキ
 616. ◦メナモミ
 617. アメリカセンダングサ
 618. タウコギ
 619. サワアザミ
 620. ノアザミ
 621. ◦オオノアザミ
 622. ◦ナンブアザミ
 623. ◦ハナマキアザミ
 624. ◦タチアザミ
 625. ◦ヒメヒゴタイ
 626. オヤマボクチ
 627. ◦コオニタビラコ
 628. コウゾリナ
 629. エゾタンポポ
 630. ◦セイヨウタンポポ
 631. ヤナギタンポポ
 632. ジンバリ
 633. ニガナ
 633. シロバナニガナ
 634. トゲチシャ*
 635. アキノノゲシ
 636. ◦ヤマニガナ
 637. ノゲシ
 638. オニノゲシ
 639. オニタビラコ
 640. ヤクソウ

ま と め

1. 秋田県湯瀬地方の標高 200~400 m の低地におけるフロラを調査し、シダ類以上の高等植物640種17変品種の所産を明らかにした。
2. 当地域の地質・気候・植生などを調査し、生育環境とフロラ上の特性について考察した。フロラ上からは岩壁地の植物、酸性性の草地の植物、林縁や原野の植物などに特徴を見出すことができた。
3. 所産植物の内28種について分布上の留意すべき点や形態上の特質について説明を加えた。

引 用 文 献

1. 岩手植物の会 1970 岩手県植物誌 岩手植物の会
2. 上村・水野 1965 秋田県花輪東南方地域の新第三系 地質調査所月報 vol.16 No.6 pp1~5
3. 大井次三郎 1965 日本植物誌 顕花篇・シダ篇 至文堂
4. 奥山 春季 1975 原色日本野外植物図譜1 誠文堂新光社
5. 長田 武正 1972 日本帰化植物図鑑 北隆館
6. 北村四郎 他 1957~71 原色日本植物図鑑 保育社
7. Kurata S. 1964 On the Japanese ferns belonging to the *Poylistichum polyblepharum* group
横須賀市博研報 No.10 pp17~41
8. 鈴木時夫他 1971 日本海指数と瀬戸内指数 日生態会誌 vol.20 No.6 pp252~255
9. 須藤 孝久 1971 東北地方のホタルイ類似水田雑草の種類について 雑草研究 vol.20 No.2 pp87~88
10. 高田 順 1975 秋田県北野のシラカンバ林 生物秋田 No.19 pp10~15
11. 高橋 雅弥 1972 秋田県の蝶 秋田自然史研究会
12. 田川 基二 1959 原色日本羊歯植物図鑑 保育社
13. 農林水産技術会議事務局 1974 飼料作物の品種解説 I.イネ科飼料作物 pp15~27
14. 畠山宏信 他 1954 昭和29年度 秋田県民有林野適地適木調査 説明書 pp1~25及び付表
秋田県林業試験場(プリント)
15. Horikawa Y. 1972 Atlas of the Japanese Flora GAKKEN
16. 村松 七郎 1932 秋田県植物誌 秋田師範郷土室
17. ————— 1935 同補遺 植物趣味 vol.4 No.2 pp83~90
18. 望月 陸夫 1972 秋田県植物目録 64P 北陸植物の会
19. ————— 1975 同補遺 北陸の植物 vol.22 No.4 pp62~67
20. 矢崎清貫 他 1966 秋田県鹿角郡八幡平付近の地質について(その1)地質調査所月報 vol.17 No.10
pp22~30
21. 山崎 敬 1959 日本列島の植物分布 自然科学と博物館 26 pp1~19
22. 結城 嘉美 1972 山形県の植物誌 同刊行会

注：なお県内のフロラ文献の中で記録を参照したものは多いがこの表からは除外した。それらについては筆者の「秋田県自然史植物学文献目録 準備資料(第4回)1977」(プリント)を参考にされたい。



1. カラマツ植林の明るい林床 (棒代野)



2. ドイツウヒ植林:下層植生はほとんど発達しない(才田)



3. 湯瀬溪谷の崩壊地や岩場



4. 非瀬沢の草地



5. ふぞろいな植生



6. 穴内沢と米代川